自国の文化をよく知り自信を持ってこそ国際人と言えるのでしょう。

ゲノム編集食品論議 近く国のルール策定

ゲノム編集食品についての記事が掲載されました。品種改良とゲノム編集そして遺伝子組み換え食品の違いも明記してありわかりやすい説明がありました。遺伝子組み換え食品の安全性が完全ではない中、日本ほか世界各国でもゲノム編集食品について今後議論が続くこと間違いありません。

他方8月19日読売朝刊解説面『ニュースの門New門』では≪ゲノム食品　文明の必然≫と題して人類の食生活の歴史の中で1万年の長きにわたって食物は品種改良を繰り返し行っていたと。その流れを考えればゲノム編集食品は必然だとするものです。（読売朝刊8・14）

リハビリが脳を復活

パラリンピックを前にテレビでパラアスリートが紹介されていますがアスリートを研究する中運動することで脳が復活することがわかったのだそうです。障害者スポーツはリハビリから発展したもの。リハビリを繰り返す（専門知識のある人のもと）ことで脳の神経細胞が蘇るという訳です。人間とはすごい物です。（読売朝刊8/26特別面）

ドラゴンへの階段　第5回

《エッセイ版》　佐藤　洋祐

皆さん、こんにちは！筆を執る今、台風15号の影響で停電中！でもおかげ様で無事に元気です！

さて、ここまでの連載で、アメリカから日本に活動を戻し、「日本でジャズという音楽の素晴らしさをより多くの皆様に」を目標に、「ご当地ジャズ」つまり皆様に馴染みの楽曲でジャズをお伝えしてまいりたいのだ、という話しをいたしました。では、このちょっと突飛な「ご当地ジャズ」は果たして皆様に愛していただけるでしょうか？

さあ、また変わり者の風変りな話し、どうぞお読み流しいただけましたら！

私は皆様に愛される音楽を必死に考え工夫して演奏してまいりますが、その前に皆様に愛していただくためにもまず私が自分の音楽を、つまりは自分をまず愛していたいのです。素晴らしい先人たちや彼らの音楽を尊敬しながらも、自分の土俵で勝負したい。

昔から日本の素晴らしい言葉に「芸の道は守破離（しゅはり）」というのがございます。芸事というのは優れた先人たちの遺産を受け継ぐことから始まる、その第一歩は「真似」です。先人の芸と己の表現を比較し、長い時間をかけ工夫改善繰り返します。比較というのは自己否定にもつながりますから（どうしてあの人みたいに弾けないんだろう、どうしてあの人みたいに足が長くないんだろう、綺麗じゃないんだろう、・・・等々）、苦しい作業かもしれません。それが好きであるということ、情熱だけがその作業を楽しみに変えてくれます。



挿絵　TAKAKO

これが「守」の段階。型を守って自分をそこに重ね合わせる、己を見つめる時です。その後にやってくる「破」の段階とは、優れた先人の芸も自分という体、魂を以て表現された時には別の輝きをもって見手聴き手に届くことを自覚する段階です。他者と比較しながらも自分を認める時期。そして、己の感性を信じ先人の創り上げた流れに敢えて別れを告げ独自の芸を練る、これが「離」。

芸の道はこの「守破離」の繰り返し、「離」を経て独自の道を歩み始めた後も先人の道に立ち返り己を見つめ直し続けますが、逆に言えば、己の道を歩まざれば芸の道とは言えないのです。己の裸の体、精神で観客の皆様に接してはじめてお客様に何かをお感じいただけ、己の魂も成長します。そんな裸になれる音楽、私は自分が無意識に幼いころから親しんでいた日本の音楽にこそ求めたいと思っています。アメリカのジャズスタンダードナンバー、素晴らしく愛しておりますが、それだけでは私は芸の道、歩み続けていけないと考えています。世の中は皆が選択できる時代、多様になりました。選択肢の有り余る時代。私は次の世代に更にいろいろな生き方の可能性が開けていることを、いいことだと肯定的に受け止めています。私もその可能性を押し広げるひとつの要素でありたい、そのためにも自分の感性を信じ己の芸の道、進んでいきます。

《佐藤　洋祐（サトウ ヨウスケ）ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞、ノミネートは4度。海外での活躍で世界的に高い評価を得た。その後2015年末千葉県に住まいを移し現在に至る。》